論文

明治期の風景の成立への出版の影響

―瀞八丁を例として―

水　谷　知　生

1．はじめに
2．「瀞八丁」の確立まで
（1）1880年代までの認識
（2）「日本名所図絵」での取扱い
（3）「日本風景論」での取扱い
3．「瀞八丁」の紹介の経過
（1）銅板印刷写真の流通の効果
（2）紀行文による紹介の効果
（3）写真での「瀞八丁」の使用
4．「瀞八丁」の定着
（1）写真と紀行文の集中
（2）雑誌以外への浸透
5．まとめ

キーワード：風景，瀞八丁，風景写真，熊野

1．はじめに

環境はある「見かた」に応じて知覚され，その意味に基づいて絵画などに表現される。その表現が集団に共同化され，見かた―風景―として定着していく[1)]。見かたは各時代の集団によって変化し得るが，わが国の自然に対する見かたが近代に変化したことについて，西田は「信仰の地，伝説の地，歌枕の地などを評価する伝統的風景観から，自然景，人文景，生活景などを評価する近代的風景観に変わった」[2)]と指摘し，尾瀬，上高地，十和田湖，大雪山などの新しい山岳風景が見出されたことを例示としてあげ，その風景観を変えた契機として，志賀重昂の1894（明治27）年「日本風景論」をあげる。

他にも近代国家創設期の明治20年代に,「「山岳と辺境」という風景と向き合った」[3]として「日本風景論」の役割が確認されているが，この時期の見かたの変化は，その後昭和初期に選定されることとなる国立公園にも結びつく重要な転換点であった。

上に指摘されているように，近世末期までに定着していた自然への見かたである「名所」「名勝」に対し，近代になって新たな見かたで人々に定着していった風景がある。その個々の具体的事例について，どのような過程で見かたが成立し，風景として定着していったのかを検証することは，近代に生じた環境の見かたの変化の本質を考える上で不可欠な作業であるとともに，現代においても生じる，見かたの変化を考察する際の背景を示唆するものとなり得る。

近代における自然の見かたの変化については，明治中期から後期にかけての動きが指摘されている。小島烏水は，1894（明治27）年の「日本風景論」の出版が「従来の近江八景式や，日本三景式の如き，古典的風景美は，殆ど一蹴された観がある・・・日本人自らの風景観も変革せざるを得なかった」[4]とその影響を重視する。また，1900（明治33）年以降流通を始めた絵葉書に関し，柏木は，かつての名所図会や風景版画に描かれた風景はすでにエピソードを与えられた場所を中心としていたが，志賀は「日本風景論」で名所ではない風景に目を向けており，観光絵葉書はこの両者の視点を持っていたことを指摘し[5]，李は，写真製版の歴史も辿った上で，「写真絵葉書の大流行により日本各地の観光名所の視覚的な定型が出来上がった」[6]とした。一方，1895（明治28）年に国内初の総合雑誌として創刊された雑誌「太陽」で掲載された風景写真について，日比[7]は創刊後3年間の国内外の風景写真と紀行文を検討し，どのような外国像を読者に提示し，「日本」という国家をどのように表象したのかを論じている。読者は海外と日本の風景を比べることにより，日本に特徴的な風景を考えさせられるとしているが，自然の見かたの変化にまでは論及されていない。

吉野熊野国立公園は1936（昭和11）年に指定されるが，吉野から大峯山系や大台ケ原の山，北山川に代表される渓谷，そして熊野の海岸の３つが国立

公園を成立させた要素であった。このうち，北山川の渓谷の一大勝地として奈良，和歌山，三重の三県境に位置する瀞峡（瀞八丁）[8]があげられている。国立公園の指定作業に携わっていた内務省の千家は，熊野を「瀞八丁のみを以て知られていた一帯」[9]と語り，瀞八丁は熊野第一の風景となっていた。熊野の風景としての認識の確立について，島津は，1891（明治24）年に瀞八丁も含め，熊野を訪れた第一高等中学校の小川琢治が，翌年，熊野を「之を探るの韻士騒客なく,空しく草莱蓬蒿の間に埋もれ」[10]た存在と記していることなどから，熊野は古くから宗教的巡礼の地であったが,山海にわたる景勝地としての認識は明治20年代に至っても一般化していなかったとする[11]。一方，神田は，1911（明治44）年の「熊野詣」[12]という著作から，当時熊野風景として一般的に知られていたのは，那智の滝と瀞峡であったと想定しており[13]，明治20年代中頃から明治末期までの間に，瀞八丁は一般に知られる熊野の風景として定着していった。この間，瀞峡がどのような経過をたどって熊野の代表的な風景となっていったのだろうか。

本稿では，明治中期以降に風景として定着した瀞八丁を対象とし，概ね明治末までの間に，紀行，旅行案内等を目的として取り上げた図書，雑誌の記事をできうる限り集め，特にそれらに掲載された画,写真に着目し，風景としての定着過程をたどるとともに，定着に影響を与えた要因について考察する。このことにより，近代の自然の見かたに変化をもたらした要因の一端を明らかにするものである。

図1　吉野熊野国立公園の区域と瀞八丁の位置

２.「瀞八丁」の確立まで

（１）1880年代までの認識

熊野川の本宮－新宮間は，近世には九里峡と称揚されていたが，瀞峡の場合は，熊野参詣道から外れた奥地であるため，その優れた渓谷美は一般にはほとんど知られることはなかった[14)]。

表1に，天保年間から明治40年頃までの瀞八丁についてふれている紀行，地誌，雑誌等を整理した。1830年代，天保年間に新宮の大石貞和らが訪れ，「八丁瀞」として紀行，漢詩を残している。「瀞」の文字が使われたのはこれが最初とされる[15)]。しかし，その後，「紀伊続風土記」では「八丁の泥」，明治に入って1872（明治5）年，新宮の湯川麑洞の詩では「玉井洞」と記されている。これは瀞八丁の入口の村である玉置口（たまいぐち）を雅化したもの[16)]で，その後，瀬見静人（日高郡）も「玉井峡」として詩を詠む。

1884（明治17）年に水戸の青山鉄槍が来訪した頃から，紀伊の外からの来訪者が確認でき，1886（明治19）年に大阪の藤沢南岳，安芸の野村文夫，1887（明治20）年に大阪の石橋雲来が来訪し，紀行，詩を残している。藤沢は「洞渓」，野村は「鬼通路渓」，青山は「瀞渓」として紹介している。このうち，野村は，当時の三重県令の石井邦猷の薦めで訪れているが，「鬼通路」は瀞八丁の三重県側の集落である木津呂を雅化したもので，石井あるいは野村がこの呼称を用いたと考えられる。

青山は紀州の依岡三交（和歌山藩町与力であった）の薦めで瀞八丁を訪れるなど，この時期，紀伊以外の人々にも瀞八丁は徐々に伝えられてきていた。野村の「遊鬼通路渓記」中，冒頭の三洲居士長芡（豊後出身）の揮毫には「南紀山水区皆稱那智奇萬古玉井峒」とあり，また末尾の西疇居士原田隆（安芸出身）の祝辞では「鬼通路渓稱八丁澱。又玉井洞」とあり，漢詩人の間では，玉井洞あるいは八丁澱の情報はある程度共有されていた。

一方で，この場所の呼称は，地元で「八丁のどろ」「どろ八丁」と呼ばれていたことが記されているが，1889（明治22）年，当時奈良県師範校長であった[17)]土屋鳳洲が「八町土呂」として紹介するまで，各人が地元での呼称以外の呼称で紹介し，統一されることがなかった。

また，この時期，瀞八丁を絵画，写真で提示する例は，1879（明治12）年の旧和歌山藩士であった横井鐵叟の「瀞八丁眞景」と題する画が和歌山県立図書館に所蔵されているが，画中には「登呂の景」と注記されており，「瀞八丁」とは表現していない。一点，注目すべきは1880（明治13）年に撮影された瀞八丁（田戸の集落を背景に下流側から写した構図。図2 a））として，前川眞澄の「風景と熊野」[18]に紹介されている写真である（以後，この写真を「明治13年写真」とする）。

1880（明治13）年当時の写真技術をみると，幕末に銀版写真が日本に伝えられ，湿板写真に移行してしばらく経過していた時期で，乾板はようやく海外で工業生産が開始された年である。国内で乾板が使われるのは翌1881（明治14）年のことである[19]。1880（明治13）年の写真であれば，ガラス板に感光膜を作り，湿っているうちに撮影し，現像までその場で行う必要がある湿板写真であり，屋外の撮影では暗室を携帯する必要があった。「風景と熊野」の写真の説明では，「舟中の箱は暗箱にし（て）一々種版をこゝで作り乾かしたるもの」とあり，湿板写真であったことを示している。技術的にも難しく，写真師の数も多くなかった時代に，撮影しても収入に結びつきにくい瀞八丁の風景写真撮影を試みた者が誰であったのか，現状で特定することはできないが，後述するとおり，この写真がさまざまな形で複製されて初期の瀞八丁のイメージを作っていく。しかし，当時，写真を印刷する技術がなかったことから，明治10年代に発行された書籍等に掲載されることはなかった。

前述のとおり，明治20年頃までは，瀞八丁を紹介した文章では，その呼称がさまざまに用いられていた。統一された呼称がないことは，それぞれの呼称が必ずしも同一の場所をイメージさせることにはならない状況であった。また，画像のイメージもなかったことから，人々は瀞八丁という場所について統一的なイメージを持ち得なかった。場合によっては，いくつかの別の渓谷が存在していると捉えられていた可能性もある，イメージの不安定な状況であったと言える。

表1　瀞八丁を取り上げた書籍・雑誌・写真帖（～1907年）

	時期		書籍等名	著者／撮影者
1	1833	天保4年？	北遊記	大石貞和
2	1839	天保10年まで	紀伊続風土記	
3	1872	明治5年		湯川麑洞
4	1879	明治12年	自筆画	横井鐵叟
5	1880	明治13年		不明
6	1883	明治16年3月	探奇小稿後編	瀬見静人
7	1886	明治19年11月	探奇小録	藤沢南岳
8	1887	明治20年9月	遊鬼通路溪記	野村文夫
9	1888	明治21年12月	大八洲游記第八巻	青山鉄槍
10		明治21年	南紀遊詩	石橋雲来
11	1889	明治22年	八町土呂の記北游記	土屋鳳洲
12	1890	明治23年8月	内国日本名所図絵第7巻	上田文齋
13	1892	明治25年5-6月	第一高等中学校校友会雑誌17-18号「むろちのしるべ」	斗南生
14	1894	明治27年10月	日本風景論：初版	志賀重昂
15	1895	明治28年5月	日本風景論：4版	志賀重昂
16		明治28年8月	日本風景論：5版	志賀重昂
17		明治28年9月	太陽1巻9号口絵	玄鹿館撮影
18		明治28年10月	文芸倶楽部10篇口絵	
19	1896	明治29年7月	旅行案内	大橋又太郎編
20		明治29年8月	大阪朝日新聞　紀の路の記	木崎好尚
21	1897	明治30年9月	太陽3巻18号「地理　億曾遊」	田山花袋
22	1898	明治31年5月	日本名勝地誌　第八篇	野崎左文・藤本藤蔭
23		明治31年7月	文芸倶楽部4巻8篇「紀の路の夏」	木崎好尚
24		明治31年9月	太陽4巻18-19号「熊野紀行」	田山花袋
25		明治31年8月	日本名勝記 下巻	遅塚麗水

表1　（その2）

	発行者	種別	瀞八丁についての記述／写真の内容
1		紀行	「八町瀞」と紹介。同行した澤錦浦は「八丁瀞」とする詩を詠む
2		地誌	玉置口村の項に「八町の泥，・・・熊野中の一大勝境なり」と記述
3		漢詩	「壬申中秋後一日再游玉井洞」 とする詩 「土人呼曰泥八町」
4		画	瀞八丁部分は「登呂の景」と注記。著者自筆の墨絵
5		写真	瀞八丁，田戸の写真。写っている舟に暗箱を載せているとの説明（前川真澄「風景と熊野」（昭和4）に掲載）
6		漢詩	「玉井峡」とする詩
7		紀行	「洞渓」として紹介。地元では土呂と呼ぶが字は「泥」を使う。泥は雅でないので，洞渓とする。明治19年8月訪問
8		紀行	「鬼通路渓」として紹介。地元では「八町澱」と呼ばれている。香谷田叔による挿画があるが，写実的なものではない。明治19年4月訪問。三重県令石井の勧めによる
9		紀行	「瀞渓」として紹介。明治17年6月訪問
10		漢詩	「玉井峡」とする詩。明治20年6月訪問
11		紀行	「八町土呂」として紹介。明治22年4月訪問
12	青木嵩山堂	旅行案内	「洞八町之景」として紹介。銅版画（明治13年写真と同構図）
13		紀行	熊野の紀行文。「木津呂峡（土俗，どろ八丁）」として紹介。小川琢治の稿
14	政教社	地理書	「泥八町」として記述，「流水浸蝕の奇抜なる結果」の深渓の例示として五串渓（陸前），猿橋（甲斐），泥八町（紀伊），山伏谷（美作），豪渓（備中）と併記
15	政教社	地理書	野村雨荘（文夫）の記述を載せ，九里峡，八町澱，鬼通路に言及，挿画なし
16	政教社	地理書	「鬼通路渓」とする挿画挿入。画は中村不折による
17	博文館	写真	日本十二名勝のうち「紀州瀞八丁」とする写真1点。瀞八丁中央付近から滑岩。小川一眞写真彫刻銅板及印刷
18	博文館	写真	「紀伊瀞八丁田戸村」とする写真（明治13年写真）
19	博文館	旅行案内	「紀州瀞八丁」とする写真（明治13年写真）。本文に関連する記述なし
20		紀行	紀行文の新聞連載。「瀞八丁」と紹介。行程を詳細に記録。
21	博文館	随筆	「今にも行って見たいのは，日本の山水窟といわれた，かの紀州熊野の山奥である。」
22	博文館	地誌	「どろ八町」と記述。土俗どろ八町と呼べるを，詞人は，瀞渓と称づけたり
23	博文館	紀行＋写真	口絵は「紀伊国瀞八丁」（明治13年写真），「投寄の写真」と注記。記事は29年8月の大阪朝日新聞記事からの抜粋版。
24	博文館	紀行	「瀞八町」として紹介
25	春陽堂	旅行案内	「瀞八丁」紹介。記述の一部を藤沢南岳「探奇小録」から転記

表1 （その3）

時期			書籍等名	著者／撮影者
26	1899	明治32年8月	文芸倶楽部5巻11篇口絵	（久保昌雄）
27		明治32年8月	太陽5巻18号口絵	（久保昌雄）
28		明治32年9月	太陽5巻20号口絵	肝付兼行
29		明治32年11月	文芸倶楽部5巻14篇「勝地案内　熊野の巡路」	田宮瓢酔
30		明治32年12月	文芸倶楽部5巻16篇「勝地案内　熊野名所」	辻本臥考
31	1900	明治33年5月	熊野百景写真帖	久保昌雄
32		明治33年7月	文芸倶楽部6巻9篇口絵	（光村利藻）
33		明治33年9月	文芸倶楽部6巻12篇「勝地案内　南紀の山水（瀞八丁）」	緑水
34	1901	明治34年1月	太陽7巻1号口絵	光村利藻
35		明治34年9月	旅の家つと　40号	光村利藻
36	1902	明治35年11月	太陽8巻14号第10回懸賞写真	久保昌雄
37	1903	明治36年2月・3	太陽9巻2-3号「紀州熊野」	浅田空花
38		明治36年9月	婦人と子ども3巻9号口絵	
39	1904	明治37年3月	日本の山水　瀞八丁	藤田徳太郎
40		明治37年8月	太陽10巻11号「歴史地理　熊野めぐり」	春山育次郎
41	1905	明治38年4月	日本漫遊案内　下巻	坪谷善四郎
42	1905	明治38年12月	大日本地誌巻四　近畿	山崎直方，佐藤伝蔵編，
43	1906	明治39年	妙義山・瀞八丁図屏風	富岡鉄斎
44	*1907*	*明治40年6月*	*文芸倶楽部13巻8篇口絵写真と「忙中閑　熊野めぐり」*	*坪谷水哉*

表1　（その4）

	発行者	種別	瀞八丁についての記述／写真の内容
26	博文館	写真	「紀伊国瀞八丁」写真2点。牛島治三郎氏寄とあるが，久保「熊野百景写真帖」（新宮市図書館蔵）の「瀞峡　奥」と「瀞峡入口」 東京築地原田印刷所印行
27	博文館	写真	「紀伊瀞八丁」（「中央の景」，「天柱巖」） 無記名だが久保「熊野百景写真帖」（新宮市図書館蔵）の「瀞　中央」と「瀞　天柱巖」
28	博文館	写真	紀州名勝（10点の写真　瀞八丁6点，那智滝4点）。肝付海軍少将寄贈　猶興舎印行
29	博文館	旅行案内	大阪からの熊野の行程案内。和歌山～潮岬，那智，本宮，瀞八丁，新宮，木之本，尾鷲から伊勢を紹介
30	博文館	紀行	大阪からの簡単な熊野紀行。大阪～勝浦，那智山，新宮，瀞八丁，玉置山，本宮，田辺，大阪の行程
31		写真帖	「瀞峡」の写真8点（新宮市図書館），6点（和歌山県立図書館），|
32	博文館		「紀州瀞八丁勝景」の写真3点（其一～其三）。無記名だが，其一は明治34年の光村の「瀞八丁入口」
33	博文館	紀行	大阪からの熊野紀行。大阪～串本，那智，新宮，瀞八丁，本宮，新宮，木之本～大阪あるいは鳥羽
34	博文館	写真	「紀州名勝」（12点のうち「瀞八丁入口」「瀞八丁奇岩」，「瀞八丁虎岩」）
35	光村写真部	紀行＋写真	瀞八町　写真1点
36	博文館	写真	久保昌雄「雨中の瀞八丁」一等入選
37	博文館	紀行	「瀞八丁」紹介
38	フレーベル会	紀行＋写真	記事「那瀑と瀞八丁」。口絵「紀州の勝景」で那智の滝と瀞八丁紹介。写真は明治13年写真
39	石敢堂	写真帖	
40	博文館	紀行	那智，本宮，瀞八丁から尾鷲
41	博文館	旅行案内＋写真	「瀞八町」紹介。写真1点（屏風岩付近）。大八洲游記を引用。藤沢南岳の文章で「遂に天下に名あるに至れり」
42	博文館	地誌＋写真	北山川の項に「瀞八町」の説明。写真1点。久保の明治33年熊野百景写真帖の「瀞峡　奥」
43		画	
44	*博文館*	*紀行＋写真*	*写真は那智の瀧，熊野新宮，徐福の墓，紀行文も本宮，九里峡から新宮市街，海岸沿いに那智，勝浦から大阪への行程。瀞八丁は含まれない*

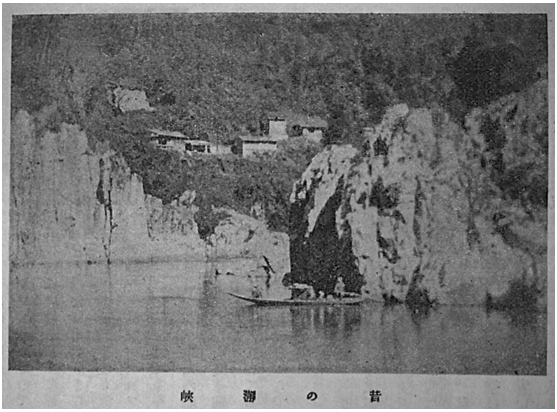

図２ａ）明治13年の写真
昭和４年「風景と熊野」

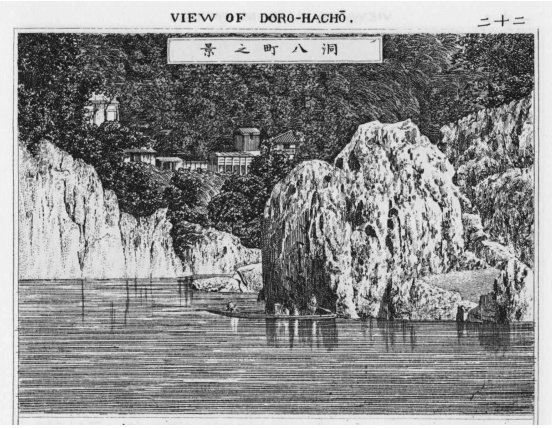

図２ｂ）洞八町之景
明治23年「内国旅行
日本名所図絵第７巻」

図２ｃ）鬼通路
明治28年志賀重昂
「日本風景論」第５版

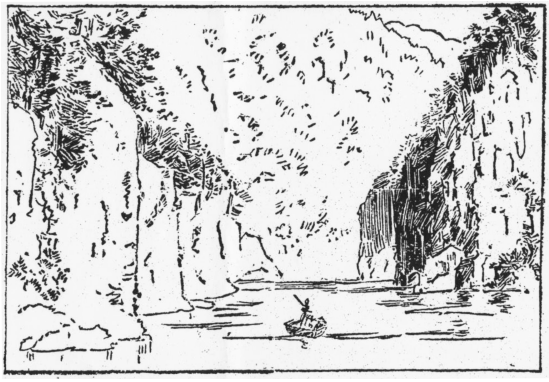

図２ｄ）紀の路の記：
瀞八丁挿絵
明治29年８月27日
大阪朝日新聞

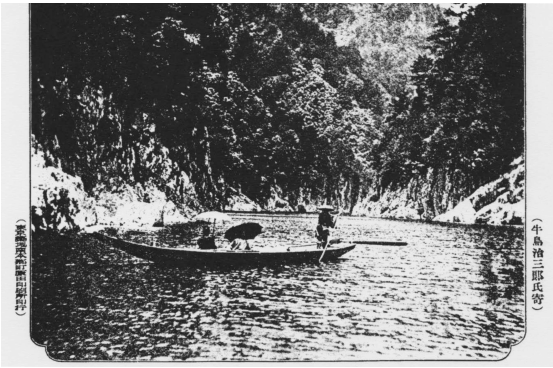

図２ｅ）紀州瀞八丁
明治32年８月
雑誌「文芸倶楽部」
第５巻第11篇口絵写真
（牛島治三郎氏寄とあるが
久保昌雄撮影）

図２ｆ）雨中の瀞八丁
明治35年11月
雑誌「太陽」第８巻第14号
懸賞写真　久保昌雄撮影

（2）「日本名所図絵」での取扱い

瀞八丁は1890（明治23）年の「内国旅行日本名所図絵第七巻」での「洞八町之景」掲載によって，大規模出版社による情報流通に乗ることとなる。発行所である大阪心斎橋の青木嵩山堂は，出版の規模と質の高さにおいて「東の博文館，西の嵩山堂」と言われていた[20]。青木嵩山堂は「内国旅行日本名所図絵」を全7巻のシリーズとして出版しているが，その前に「世界旅行萬国名所図絵」全7巻を出版している。熊田は1885（明治18）年から1890（明治23）年にかけて出版されたこれらのシリーズを，銅版本の極致とも到達点ともいうべきものと評価し，「文字も絵もすべてが精緻な銅版印刷で摺られ，猶龍堂，松盛堂，励昇堂など数軒の銅版師の仕事であることが刻銘から解る」[21]と説明する[22]。この日本名所図絵の紀伊国のうち熊野地方では，田辺六景之内奇絶境之景，湯峯円月洞之景，湯峯温泉場之景，マブノ湯之景，鬼橋岩之景，熊野浦捕鯨之図，那智瀑布之景，那智山観音堂之景，熊野新宮之景，花窟之景，洞八町之景，熊野本宮之景の12図版がとりあげられている。洞八町は銅版画（図2 b）とともに「花井村より北山川，沿岸を鬼通路と云，洞八町の雅景あり，文人墨客の賞観処は鬼通洞より田戸村の，眺望は殊に絶佳なり」と説明されている。「洞八町」が「鬼通路」に含まれると説明していること，文人墨客の観賞ポイントとされる「鬼通洞」は，野村文夫の「遊鬼通路渓記」にも書かれておらず不明な場所であることなど，説明内容はやや混乱が見られる。

一方，銅版画は，明治13年写真と同構図であり，写真を元に銅版画を彫版したものである。日本名所図絵の他の銅版画も，写真を元に彫版したとみられるものも多く，各地の名所の写真を集めていたと考えられる。青木嵩山堂は，瀞八丁の明治13年写真をどこかからか入手し，名所図絵に銅版画にして掲載した。タイトルの「洞八町」は写真にそうあったのか，あるいは写真入手時に「洞八町」という説明を受けたのであろう。なお，日本名所図絵の著者上田文齋の三男が出版者の青木恒三郎であり，次男が写真家，写真機材商としても著名であった上田貞治郎である。写真の入手は貞治郎が関わっていた可能性もあるが，精査が必要である。

日本名所図絵は世界名所図絵とともに非常な人気であったと言う[23]。瀞

八丁は，写真様の巧みな銅版画とともに「洞八町」として人々の目に触れることとなった。名所図絵出版の翌年の1891（明治24）年12月に小川琢治が熊野を旅し，記録を残しているが，そこでは小川は「木津呂峡（土俗，どろ八丁）」として紹介している。また，熊野の山水について，探勝する者はなく，その名を知る者がないと記している点は1章で述べたとおりである。日本名所図絵の出版によって瀞八丁あるいは熊野への訪問者が増えていたわけではないようだ。

（3）「日本風景論」での取扱い

明治20年代前半には，まだ探勝する者が少なかった熊野の山水であるが，一般に普及する旅行案内書に瀞八丁が登場するのは，1905（明治38）年の「日本漫遊案内」が最初と見られ，それまでの間は，一般には紀行文や紹介文あるいは写真によって，瀞八丁が認識されることとなる。

1894（明治27）年10月に志賀重昂の「日本風景論」の初版が発行される。日本風景論の中で志賀は，「流水浸蝕の奇抜なる結果」の深渓の例示として五串渓（陸前）[24]，猿橋（甲斐），泥八町（紀伊），山伏谷（美作）[25]，豪渓（備中）と併記し，「泥八町」という呼称で紹介している。しかし，翌1895（明治28）年の第4版では，「流水浸蝕の結果は，日本の風景に美，奇，大を添うもの」との記述の後に，その例示として野村雨荘（文夫）の「遊鬼通路渓記」の九里峡と瀞八丁の記述を転載し，「紀伊の九里峡，澱八町，鬼通路の如き，其名未だ多く世間に喧伝籍甚せずと雖も，洵に流水浸蝕の美，奇，大を代表するもの」と記している。初版発行後，野村の「遊鬼通路渓記」にどこかでふれ，その漢文体の記述を転載している。4版では澱八町と鬼通路が並記され，別の箇所と考えられている可能性もあるが，2章（1）で述べたとおり，野村の「遊鬼通路渓記」末尾の西疇居士原田隆の祝辞では「鬼通路渓稱八丁澱。又玉井洞」とあり，それぞれの呼称が同じ場所を指していることは記されていた。

「日本風景論」第5版は，4版の3ヶ月後に出版されるが，「鬼通路（紀伊国南牟婁郡北山川の流域）」と題する画が挿入される（図2 c）。志賀の「日本風景論」には挿画が何点かあるが，版を重ねるごとに増え，その経過については

増野に詳述されている[26]。「鬼通路」の中村不折の挿画は，構図としては明治13年写真と日本名所図絵の銅版画と同じである。どちらを見て描いたかと言えば，田戸の家屋の形状の類似点から，銅版画を参考に描いたとみられる。名所図絵の精緻な銅版画と比較して，「鬼通路」の挿画は写実性が低下している。挿画の掲載は，「其名未だ多く世間に喧伝籍甚せず」という状態にある場所をいち早く画像で紹介しようとする意図が感じられる。名所図絵での「洞八町」という名称ではなく，「鬼通路」として掲載しており，日本名所図絵の「洞八丁」と野村の「鬼通路」は同じ場所であることは理解されているが，あえて「鬼通路」の名称を挿画に使っている点は，志賀の漢文学を志向する見かたによるものと考えられる。

3．「瀞八丁」の紹介の経過

（1）銅版印刷写真の流通の効果

日本風景論に明治13年写真を元にした瀞八丁の挿画が掲載されたのと同時期に，教科書や実用書を幅広く大量に出版していた博文館は，雑誌「太陽」と「文芸倶楽部」に「瀞八丁」を紹介する写真を立て続けに掲載する。この時期，写真を印刷物に複製する技術が普及し始めている。その技術は，網目版[27]を用いる方法で，1882年にドイツで特許がとられ，国内では，陸地測量部の堀が雑誌からこの方法を学び，亜鉛版に焼き付けた網目版を創作し，1890（明治26）年に日本最初の写真凸版製版所である猶興舎を創設した[28]。一方，小川一眞はアメリカで網目銅板の写真製版法を学び，1893（明治26）年に製版，印刷機材を持ち帰り，翌年，網目版印刷業を開始した[29]。

猶興舎や小川一眞の網目版での写真印刷技術を出版物に活用したのは，博文館であった。博文館は1894（明治27）年8月に創刊した雑誌「日清戦争実記」において，網目銅板印刷を用いて軍人の写真を多く掲載し，10万部を超える発行に成功している。そして，1885（明治28）年1月創刊のわが国最初の総合雑誌である「太陽」でも口絵写真を多く掲載する方針で号を重ねていく。これら雑誌の口絵写真の多くは小川写真製版所で製版，印刷された[30]。

1895（明治28）年9月の「太陽」の口絵に玄鹿館[31]撮影とされる「日本十二

勝」の写真が掲載され，1枚が「紀州瀞八丁」と題する瀞峡中央から上流の風景である。志賀が「日本風景論」第4版で「其名未だ多く世間に喧伝籍甚せず」と紹介している瀞八丁が「日本十二勝」に含まれ写真で紹介されているのである。もっとも，この十二勝は何らかの選択を行って12箇所に絞ったものではなく，撮影者である玄鹿館（鹿島清兵衛）がこの時点で提供できた日本の12箇所の風景と捉える必要があるが，それにしても瀞八丁の写真が撮影されていてストックがあったという点は注目すべきである。

同年の博文館の雑誌「文芸倶楽部」の口絵写真に「紀州瀞八丁田戸村」と題する写真が掲載されるが，これは明治13年写真であり，撮影者の記載はない。その後，翌1896（明治29）年の博文館の「旅行案内」に「紀州瀞八丁」とする写真が載るが，これも明治13年写真，1898（明治31）年の「文芸倶楽部」の熊野の紀行文とセットになった口絵写真も明治13年写真である。別の大手出版者である春陽堂も1898（明治31）年に「日本名勝記」とする旅行案内を発行し，瀞八丁の紹介はするものの，写真は掲載できていない。博文館についてもこの時期までは，明治13年写真以外，自由に掲載できる写真は入手できていなかった。

（2）紀行文による紹介の効果

瀞八丁の写真の掲載と並行して，紀行文による紹介も1896（明治29）年からみられる。この年の8月8日から30日まで，大阪朝日新聞に「紀の路の記」と題する木崎好尚記者による紀行文が連載される。鳥羽から二木島，木の本，那智山，新宮，熊野川，瀞八丁と巡り，十津川から五條を経て大阪に戻る行程を19回にわけて連載した。木津呂と鬼通路は同じであること，玉置口から田戸までのおよそ十町の間を瀞八丁と呼ぶこと，「とろ」に洞の文字を当てるのは適当でないことなどを明快に説明し，瀞八丁の描写も相当量行っている。瀞八丁の中央付近と見られる挿画も1枚掲載されている（図2 d）。瀞八丁は古来世に知られていなかったが，近年「好奇の士，稍其勝を玩ぶに至」っていること，木崎は大阪保険の竹内氏の話を聞いて瀞八丁への関心を持ったことを記しており，徐々に探勝者が増えつつある状況がうかがえる。

田山花袋は，木崎の紀行に触れたかは不明であるが，木崎の連載の翌年，1897（明治30）年の「太陽」に寄せた旅に関する随筆「憶曾遊」の中で，「今にも行って見たいのは，日本の山水窟といわれた，かの紀州熊野の山奥である」と熊野への並々ならぬ意欲を示し，翌1898（明治31）年3月から実際に探勝し，那智瀑，熊野川，瀞八町の印象を「熊野紀行」として「太陽」に2回に分けて連載する。杉井[32]は，花袋は数多くの紀行文を残しているが，この「熊野紀行」は，その後に書かれた紀州の紀行に較べ「臨場感は他を圧している」と指摘する。花袋は，瀞八丁に入った瞬間に，「伊軋たる柔櫓の音は，音も無く響もなき深谷に反響して，聴くものをして一種いうべからざる壮快（サブリミチー）を感ぜしむ。・・あゝこの寂寞！　今まで狂い，叫び，乱れたる渓流をのみ観来りて，俄かにこの沈黙限りなき深谷の中に入る。あゝわがこの一瞬間の感を，われはいかにして状すべきか。・・・この一刹那に感じたる如き深長幽遠なるある物に触れたる事は，一度だに無し。」[33]と記し，「花袋の興味はスリリングな景色，地形，そして視界に集中する。‥，〈美しい景色〉などの表現を拒ませる威力，〈神〉という言葉が思わず口をついて出る厳粛さ，多彩な熊野の神秘が，「サブリミチー」に収斂され，孤独とはニュアンスを違えた〈寂寞〉を確認させ」[34]た，と評する。このような圧倒的な表現は当時の読者にも伝わったであろう。

木崎の紀行が掲載された大阪朝日新聞は発行部数が毎日平均7万6千部程度あり[35]，花袋の紀行が載った雑誌「太陽」の発行部数は毎号10万部を超えていた状況から，明治30年前後に，木崎と花袋の紀行文は，熊野地方への一般の関心を高める作用を果たし，瀞八丁を熊野の探勝すべき風景として，一般に浸透させる効果をもたらした可能性が高い。

（3）写真での「瀞八丁」の使用

先に，1890年頃までは，瀞八丁に対し様々な呼称が用いられていたことを示したが，「日本名所図絵」や志賀の「日本風景論」でも，いわばその状態を反映し，統一的な名称が用いられていなかった。しかし，1895（明治28）年から出版された博文館の雑誌や旅行案内では「瀞八丁」と統一されている。博

文館では，「太陽」第1巻第9号の口絵写真「日本十二勝」の中にある「紀州瀞八丁」が「瀞八丁」使用の最初である。前述のように，この写真は「玄鹿館撮影」「小川一眞写真彫刻銅版及印刷」と注記があり，玄鹿館（鹿島清兵衛）が撮影した12の写真を一部重ねて配置し，地名表記も加えた版を小川一眞が作製し，印刷したものとなっている。玄鹿館の写真タイトルが「瀞八丁」となっていたと考えられ，博文館の編集で名称が整理されたわけではない。この時の十二勝は，紀州瀞八丁，沼津江の浦，鈴川望嶽，室蘭石門，舞子海浜，紀州和歌浦，富士川急流，松島不老島，函根山中畑，大和月ヶ瀬，宇治川急流，伊豆網代漁村と，全国各地の写真が挙げられている。すべて鹿島が撮影したのかは不明であるが，現地での撮影，あるいは事前情報の収集に際して「瀞八丁」の名称を認識し，整理したものと考えられる。博文館は，玄鹿館の写真掲載以降，迷いなく「瀞八丁」の名称を使い，もはや，それ以降は，他の出版者の出版物も含め，「瀞八丁」以外の名称はほぼ出現しなくなっている。

4．「瀞八丁」の定着

（1）写真と紀行文の集中

博文館の雑誌口絵に登場し始めた瀞八丁を含む熊野の風景は，明治30年代前半を通じて頻繁に取り上げられる。写真については，最初の玄鹿館の「紀州瀞八丁」の写真以降，しばらく明治13年写真が用いられていたが，1899（明治32）年8月に「文芸倶楽部」と「太陽」に計4点の写真が掲載される（「文芸倶楽部」掲載の1点について図2 e）。「文芸倶楽部」掲載写真は「牛島治三郎氏寄」と記され，「太陽」掲載写真には注記はない。しかし，これら4点の写真は，1900（明治33）年に新宮の久保昌雄[36]がまとめた「熊野百景写真帖」（新宮市立図書館蔵版）[37]に収録されている瀞八丁の写真8点のうちの4点であり，久保の写真である。この時期，雑誌「太陽」のセールスポイントの一つが口絵の銅版写真であり[38]，雑誌の発行部数の多さも相まって，口絵写真への掲載を求める者が少なからずあったと考えてよいだろう。久保が博文館に写真を送付して口絵への掲載を求めた可能性はある。1899（明治32）年9月には肝付海軍少将寄贈とある[39]「紀州名勝」と題する写真10点が掲載されて

いる。紀州名勝と言っても，写真のうち6点が瀞八丁，4点が那智滝であり，この時点で瀞八丁は紀州の名勝の中心になっている。この時期までに多くの者が瀞八丁を探勝し，写真におさめていたことは間違いなく，同年の11月と12月に「文芸倶楽部」に「勝地案内　熊野の巡路」，「勝地案内　熊野名所」と，熊野の紀行文，旅行案内に頁が割かれ，翌1900（明治33）年9月の「文芸倶楽部」には瀞八丁の紹介紀行である「勝地案内　南紀の山水（瀞八丁）」が掲載される。1898（明治31）年9月の田山花袋の「熊野紀行」から1901（明治34）年1月までの博文館の雑誌「太陽」と「文芸倶楽部」での熊野，とりわけ瀞八丁の取り上げ頻度は極めて高い。「勝地案内　熊野の巡路」の冒頭は「花袋子の南船北馬の熊野紀行や北紀伊の海岸の記文を詠んだ人は，熊野旅行が必ず仕（して）見たくなるだろう。然しこれは紀行文として書かれたのであるから・・」と花袋の文章では旅行案内としては不十分なため，具体的な行程の紹介をする必要があるとして，十日間余りの旅程案を示している。花袋の熊野紀行がきっかけとなって熊野，特に瀞八丁を探勝する者が増え，それに対して具体的な案内を掲載する動きであり，花袋の紀行の影響の大きさを示すものと言えよう。雑誌編集者にとって，旅行案内とともに掲載する写真への期待はあり，そこへ1899（明治32）年の久保の写真提供があったとすれば，掲載の確度は高かったと言えよう。

久保は，「熊野百景写真帖」を皇太子の結婚奉祝のために皇室に献上し，1900（明治33）年5月に東宮大夫から感謝状を受けている。久保昌雄は，「我技我郷の山水に負う所極めて大なり我郷山水の奇を天下に紹介する我が当然の責務たらずんばあらず」[40]と語っており，熊野の風景を広く周知させる方法として博文館へも写真送付を行ったと考えられる。しかし，無記名，あるいは他者の寄贈として紹介されることが本意であったのだろうか。1902（明治35）年11月に雑誌「太陽」の懸賞写真に久保の「雨中の瀞八丁」が一等入選している（図2 f）。島津[41]，神田[42]は，この入選が久保の名が広く世間に知られる契機となったとし，神田はこの入選から瀞峡が象徴的な熊野の風景として認識されるようになっていったと推察する。しかし，博文館の雑誌での熊野，瀞八丁の取り上げ頻度をみると，1898（明治31）年～1900（明治33）年が

ピークで，その後は頻度が下がっており，久保の懸賞入選より以前に瀞八丁の風景の紹介は進んでいた。懸賞への応募は，それ以前の無記名での熊野の写真紹介に対し，久保の名前を主張したいという意思であったと考えられる。

（2）雑誌以外への浸透

1904（明治37）年3月に藤田徳太郎による「日本の山水　瀞八丁」という写真集が京都の石敢堂から出版されている。瀞八丁の写真のみ14点，コロタイプ印刷により掲載した豪華な写真集であり，「日本の山水」シリーズの第一号として出版されている。事前の出版予告[43]では「本書は我日本国のあらゆる絶佳勝景を遠近不漏・・毎月必ず十二葉一冊を発行して終に大日本国の勝景を盡さんとす　今回第一巻として最も有名なる紀州瀞八丁の絶景を出すことゝせり斯道の士は擧て一本を座右に備へ給ふべし」とある。石敢堂と藤田は，画家の素材としての写真集「自然」のシリーズ[44]を出版しており，斯道の士とはおそらく山水画家を意味している。「日本の山水」シリーズはこの1号だけで，その後出版された形跡はないが，日本の山水の「最も有名なる」ものとして紀州瀞八丁がとりあげられている。画，おそらく山水画の素材の地としての関心であり，旅する場所との認識とは少し角度は違うが，この時期，国内でも知名度のある山水の地との認識があったことを示している。

一方，1904（明治37）年8月の「太陽」の「歴史地理　熊野めぐり」は那智，本宮，瀞八丁から尾鷲までの紀行文だが，「瀞八丁の勝，その境の小にして狭きは遺憾ながら，その容易に獲難きの景色なるは勿論にて，わが年来探訪したる中にて奇観と思えるものゝ一には洩れず」と，花袋の紀行にみられた感動は全くない。紀行と写真による事前情報から期待される風景とは違っていたのであろうか。そして，1907（明治40）年の坪谷水哉（善四郎）の「文芸倶楽部」の「忙中閑　熊野めぐり」では，那智滝，新宮，本宮をめぐるが，瀞八丁には寄らず，紹介されていない。博文館の雑誌での瀞八丁の集中的紹介はここまでで，長期間にわたらなかったが，旅行案内や地誌では，1905（明治38）年の坪谷善四郎の「日本漫遊案内下巻」，山崎直方らの「大日本地誌巻四」で，瀞八丁は写真とともに紹介され，熊野の風景の一部として定着していく。

未知の場所，未知の風景の探勝という観点からの瀞八丁への関心は，田山花袋の紀行と，博文館の写真で一気に高まりを見せる。しかし，実際のアプローチは熊野川と北山川の合流点(出合)から北山川沿いに玉置口まで徒歩で約10km北上し，そこで舟を借りて瀞八丁を探勝する行程が紹介されており，「地はなはだ僻にして道は悪し」[45]という状況であった。1899(明治32)年には大阪商船が大阪～田辺航路を開設し，その年の12月には三輪崎（新宮市）まで延伸し，大阪から熊野への輸送ルートが確立した。博文館の雑誌でも早速，1899(明治32)年12月の「勝地案内　熊野名所」では，大阪～勝浦の航路で熊野に入るルートを紹介している。大阪商船から依頼された記事とも思われるタイミングである。大量輸送というにはまだ船舶のトン数も小さかったが，熊野の名所を案内する中で，瀞八丁については，交通手段，宿泊施設が貧弱であり，積極的な紹介をしにくい面があった。明治40年代以降，博文館の雑誌での瀞八丁の紹介記事，写真は見られなくなる。雑誌「太陽」の口絵写真については，この時期は国内の風景写真の取り上げが少なくなった時期であり[46]，掲載頻度だけで関心の程度を考察することは困難である。しかし，紀行文での記述内容の変化から，未知の探勝対象としての瀞八丁の雑誌での紹介は，明治30年代半ばで一段落したと捉えられる。

5．まとめ

ここまで，明治期の瀞八丁の風景の定着経過を見てきたが，1890(明治23)年頃までは，「玉井渓」，「鬼通路」，「洞八町」など漢詩人により様々な名称で紹介されるが，紀州の山水の秘境として，訪れる者も少ない場所であった。1890(明治23)年の「日本名所図絵」は人気を博した旅行案内であり，「洞八丁」として取り上げられるが，他の出版物への波及はみられない。1897(明治27)年の志賀の「日本風景論」は，翌年の第5版で「鬼通路」の挿画を載せるが，これによる他の書籍等への影響は見られない。「瀞八丁」という名前を一気に定着させた要因は，1895(明治28)年から博文館の雑誌に掲載された写真，紀行文と大阪朝日新聞の紀行文であった。紀行文では1896(明治29)年の木崎の「紀の路の記」に始まり，次いで1898(明治31)年に雑誌「太陽」に掲

載された田山花袋の「熊野紀行」の臨場感あふれる描写の効果が大きかった。一方で1895（明治28）年から1900（明治33）年までの間に，博文館の雑誌「太陽」と「文芸倶楽部」に瀞八丁の写真が多く掲載され，写真と紀行文が一体となって人々の眼前に繰り返し示されることにより，風景として定着することとなった。

1895（明治28）年9月に「太陽」に掲載された，玄鹿館撮影，小川一眞銅版印刷の「紀州瀞八丁」の写真が，瀞八丁を「瀞八丁」として紹介したことで，様々に呼ばれていた名称の並列はなくなる。詩文は，詠み語った者の観念により，雅化した地名を用いることに寛容であった。これに対し，写真は，撮影者の観念を示す手段とは捉えられておらず，雅化した名称を使う余地を残さなかったと考えられる。

博文館の雑誌での瀞八丁の取り上げによって，風景として定着し，1904（明治37）年の藤田の「日本の山水」の紹介の中では，瀞八丁が最初に取り上げられる。1895（明治28）年から1904（明治37）年まで，10年にも満たない期間に，特に前半の5，6年の間の雑誌での写真と紀行の取り上げによって，瀞八丁は一気に熊野の代表的風景となったことが認められる。その後，旅行案内や地誌に瀞八丁は記載され，風景としての定着は強まった。瀞八丁の例から，明治30年前後，複製技術が確立した写真という媒体に紀行文が相まって，大量消費される雑誌という舞台を得て，短期間に新たな風景が生産されたことが確認できた。

この時期は，奇しくも志賀の「日本風景論」が世にでた時期と同じではあるが，「日本風景論」は，瀞八丁の風景の成立に役割を果たしたとは言えない。むしろ，「鬼通路」という雅化された名称で挿画とともに紹介している点からは，漢文学の視点を濃厚に感じさせる点を指摘しておきたい。

博文館の雑誌への瀞八丁の写真の提供は，多くは新宮の久保昌雄によってなされていた。「我郷山水の奇を天下に紹介する」意図は，口絵写真を売り物にした博文館の雑誌という媒体に乗ることにより，見事に成功した。熊野の風景の生産に及ぼした久保写真館の貢献は，これまで「熊野百景」に関する写真集[47]の制作による活動が着目されていた[48]が，瀞八丁の紹介の最初期にお

いて，博文館の雑誌口絵写真を通じた久保の貢献の重要さが明らかになった。

瀞八丁について，未知の風景の探勝という観点からの人々の関心，雑誌での紹介は，明治30年代後半には一段落する。その後，大正期に入り，プロペラ船の就航により交通環境が改善され，別の段階を迎える。1937（昭和2）年の日本二十五勝での選定を経て，1936（昭和11）年に吉野熊野国立公園の一部として指定される。そして，1939（昭和14）年には国定教科書である「小学国語読本」[49]に「熊野紀行」という文章が載り，那智，新宮，本宮の熊野三山と瀞を紹介する紀行と挿入写真は，一定年代の日本人が必ず口にし，目にすることとなり，瀞八丁は，その後しばらくの間は，熊野の，そしてわが国を代表する風景であり続けた。

補注及び引用文献

1）阿部一（1995）：『日本空間の誕生』，せりか書房
2）西田正憲（2011）：『自然の風景論』，清水弘文堂書房，p.335
3）山本教彦・上田誉志美（1997）：『風景の成立』，海風舎，p.261
4）志賀重昂著・小島烏水解説（1937）：『日本風景論』：岩波書店
5）柏木博（1987）：『肖像のなかの権力』：平凡社，pp.78-85
6）李孝徳（1996）：『表象空間の近代』：新曜社，p.158
7）日比嘉高(1999)：創刊期『太陽』の挿画写真―風景写真とまなざしの政治学―：筑波大学文化批評研究会編集・発行『植民地主義とアジアの表象』．pp.61-87
8）国立公園指定当時，瀞峡と呼ばれていた部分は，奥瀞，上瀞，下瀞の3箇所に分かれている。このうち下瀞を瀞八丁と呼ぶ。明治初期から瀞八丁が注目を集め，単に瀞峡と呼ばれることもあり，その後，上瀞，奥瀞へと関心の対象が広がっていき，瀞峡の範囲も広がっていった。本稿では，明治中期以降の瀞八丁部分を中心に論じ，基本的に瀞八丁と記すが，引用部分について瀞峡とされている部分には，下瀞のみを指す場合と奥瀞まで含めた範囲を指している場合がある。
9）千家哲麿（1936）：熊野の海岸，国立公園8（8），pp.22-25
10）斗南生（1892）：むろちの志るべ，校友会雑誌17，pp.24-29
11）島津俊之（2007）：小川琢治と紀州―知の空間論の視点から―，地理学評論80（14），pp.887-906
12）大村芳樹（1911）：『熊野詣』，出版社不明
13）神田孝治（2009）：吉野熊野国立公園の指定と熊野風景の変容，和歌山大学観光学部設置記念論集，pp.99-113

14）熊野川町史編纂委員会編（2008）：『熊野川町史　通史編』p.675
15）田原慶吉（1929）：瀞峡の文字考證，前川眞澄『風景と熊野』
16）前掲15）
17）横山弘（2001）:『大宮武麿氏旧蔵書目録』，pp.93-97
18）前川眞澄（1929）：『風景と熊野』，p.96
19）日本写真家協会編（1971）：『日本写真史1840-1945』，平凡社
20）青木育志（2010）：青木嵩山堂の出版活動，吉川登編『近代大阪の出版』，創文社
21）熊田司（2003）：明治前半期大阪の出版と印刷―「銅版本」を中心に―，大阪の歴史と文化財11号，pp.5-14
22）萬國名所図絵には刻銘が施された図版が多いが，日本名所図絵には刻銘はみあたらない。しかし，両者に共通して掲載されている湊川神社の図版は，萬國名所図絵では松盛堂と刻銘があるが，日本名所図絵では刻銘がない。熊田の推定する銅版師によって作られたと考えてよいであろう。
23）前掲20），p.90
24）厳美渓の一部
25）広重の「六十余州名所図会」に取り上げられた渓谷であるが，地図や地名辞典の類には見当たらず，推定される場所はあるが明確ではない（『広重六十余州名所図会』（1996）岩波書店，解説）。
26）増野恵子（2008）：志賀重昂『日本風景論』の挿図に関する報告，神奈川大学21世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議編「非文字資料から人類文化へ―研究参画者論文集」
27）写真，絵画などの濃淡を印刷するための凸版の一種で，網点の疎密面積によって濃淡を表現する。
28）（独）国立印刷局・お札と切手の博物館（2010）：『お札と写真術展』
29）吉野（岡塚）章子（2011）：小川一眞が手がけた網目版印刷について―東京朝日新聞を中心に：芸術学研究16号，pp.91-99
30）金子勤（2001）：初期『太陽』に見る明治写真術の展開：鈴木貞美編「雑誌『太陽』と国民文化の形成」思文閣出版所収，pp.87-112
31）玄鹿館は鹿島清兵衛が1895（明治28）年2月に東京に開業した写真館で，撮影の他，機材販売，写真製版まで行った。
32）杉井和子（2004）：田山花袋の旅と熊野，国文学・解釈と観賞874，pp.39-46
33）田山花袋（1898）：熊野紀行，太陽第4巻18，19号
34）前掲32）
35）明治28年の数値。内務省（1899）：『大日本帝国内務省統計報告，第12回』
36）久保写真館の活動と久保の写真が人々の熊野の風景認識に及ぼした影響ついては島津俊之（2007）：明治・大正期における「熊野百景」と風景の生産―新宮・久保写真館の実践―，人文地理59（1）pp.7-26に詳しい。

37）前掲36）島津により，「熊野百景写真帖」は複数種類作製されており，掲載されている写真がかなり異なっている点が指摘されている。新宮市立図書館蔵版は，熊野文化企画編（2001）『今昔・熊野の百景』，はる書房，に複製されており，それを参照している。なお，新宮市立図書館版の他，和歌山県立博物館蔵版，和歌山県立図書館蔵版を確認できたが，1899（明治32）年に雑誌「太陽」に掲載された瀞八丁の写真と同一の写真は，新宮市立図書館蔵版では確認されるが，他の版では確認できない。新宮市立図書館蔵版の制作年度が他の版に比べて古いことが想定されるが，この点は精査が必要である。
38）雑誌発行から3年間，明治30年までは，表紙には雑誌の主要記事の内容紹介はなく，口絵写真のタイトルのみが記載されており，口絵写真を相当重視していたことが確認できる。
39）肝付兼行。本人が撮影した写真かどうかは不明。
40）小野芳彦（1920）：『熊野百景写真帖』序
41）前掲36）
42）前掲13）
43）松田愛編（1904）：『京都大家画鑑．十二大家之部』，石敢堂，広告欄
44）1904（明治37）年の第1巻「鶴」，第2巻「虎」など，動物の様々な姿態を写し，画の素材として提供したもので，以後40巻以上出版されている。この時期の写真の一つの利用方法として注目すべきである。
45）春山育次郎（1904）：熊野めぐり，太陽10巻11号
46）雑誌「太陽」では，1895（明治28）年の創刊から1902（明治35）年までの間，毎号，口絵写真は15頁弱が割かれており，その多くは人物写真であるが，３頁以上が国内の風景写真にあてられている。その後は口絵写真の全体頁数も減少し，国内風景写真が毎号掲載されることはない。
47）久保昌雄による『熊野百景写真帖』（1900年頃），久保写真館（1913）『熊野百景』，久保嘉弘篇（1920）『熊野百景』
48）前掲36）
49）文部省（1939）：『小学国語読本尋常科用巻十』